

女子大学生における母娘関係が

娘の自尊感情と抑うつに与える影響

野間あずさ¹⁾ 牛尾恵¹⁾ 横瀬洋輔²⁾ 境泉洋³⁾

The Effect of Mother-Daughter Relationship to Self-Esteem and Depression
in College Women .

Azusa NOMA Megumi USHIO Yosuke YOKOSE Motohiro SAKAI

Abstract

The purpose of this study is to investigate the relationship between daughter's self-esteem and depression, and mother-daughter relationship of college women.

It is closely related to self-esteem and parent-child relationships. A mother-daughter relationship is kept close spanning over a lifetime and the relationship variously affects both mother and daughter. In addition, depression is common in young women. College students are in an age in which change occurs in the relationship with the parent and it is a period in time when they are exposed to various stimuli prompting changes. As a result, it is presumed that depression in college women is likely increase.

Results from this study reveal, daughters who have built a close relationship with the mother, have significantly higher self-esteem and lower depression than that of the daughters who do not have a close relationship. Additionally, daughters who live with their mother and are annoyed with their mother have lower self-esteem than daughters who do not live with their mother.

Key Words ; mother-daughter relationship, self-esteem, depression

1) 徳島大学大学院総合科学教育部

2) 徳島大学病院 精神科神経科・心身症科

3) 徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部

【問題と目的】

1. 現代の母娘関係

母と娘の関係はさまざまであるが、そのひとつとして、近年よく耳にするようになった「一卵性母娘」と表現される関係がある（信田，1997）。「一卵性母娘」とは、母親と娘が情緒的にも経済的にも互恵的な関係を結びやすく、親密にすることでお互いに得るものがある、支え合いの関係である（藤田・岡本，2009）。北川（2004）においては、母親が老いて衰えて娘の労りの対象になっても、母親は「いくつになっても母は母」として娘の親しみと愛情、依存の対象であり続け、母と娘の相互性のある良好な関わりが維持されることが示されている。こうした、母親に対する娘の信頼、共感、愛のような情緒密着は、居住状況や学歴、学卒や就業の要因に影響されない強い絆であるとされている（船越ら，2012）。

一方で、この「一卵性母娘」と対になるともいえる「墓守娘」という言葉がある（信田，2008）。墓守娘とは、過干渉で支配的な母親を持つ娘を指す造語である。母親が娘の人生に口を出すあまり、両親の死後は先祖代々の墓の「墓守」を頼むとまで言われた娘の事例が由来となっており、母との間に適度な距離を保つことができず「母から離れたい、でも母を捨てるのはしのびない、という葛藤」（信田，2008）等、母に対して負の感情を抱える娘のことを比喩的に表す言葉として使われている。

2. 母娘関係と娘の自尊感情

近年、自分を尊い存在であるとする感

情（加藤・中島，2011）という意味である「自尊感情」という言葉をよく耳にするようになったが、この自尊感情と母子関係には深い関係がある。たとえば渡邊・平石（2007）は、中学生において、母親の自尊感情と子どもの自尊感情が有意な正の相関を示していることを明らかにしている。

母親との関係は、多くの子どもにとって「拠りどころ」となるのも事実であり（加藤・中島，2011）、女性同士の世代間の組み合わせ、すなわち母娘の関係は生涯にわたり密接なまま維持され、成人期における発達に対してその関係性は双方向的に様々な影響を及ぼすとされている（北村，2008）。また、小川ら（2011）の研究によると、自分の母親を頼もしい、尊敬できる親だと考えている青年期女性は、親は肯定的に私を受け止めている・親から良い子だと思われているという認知を持ち、それが自己肯定につながり、青年期女性の自尊感情を高める要因となっていることが明示されている。つまり、青年期女性の自尊感情は、娘が勝手に自分ひとりで構築していくのではなく、必ず、同性である母親の自分への評価を経由して自己を評価するという構造が実証されており、以上のことから、母親が娘の自尊感情に与える影響は大きい。

3. 母娘関係と娘の抑うつ

近年、大学生によく見られる問題として抑うつが挙げられる。青年期はそもそも抑うつを経験しやすい時期であり、大学生は学業や対人関係、職業選択などの様々なストレスイベントを経験する機会

も多く、発達のにも自己への内省が高まる時期である（及川・坂本，2007）。したがって、様々な刺激にさらされ、変化を求められる時期であるといえる。このようにストレスにさらされやすい大学生において、先行研究から、生活ストレスの程度が高くなるにしたがって抑うつ症状も高くなることが示されている（高倉，2000）。また、大学生は、一人暮らしをするために初めて親元を離れる学生も多くみられるなど、親との関係性が大きく転換する時期でもある。高倉ら（2000）の研究によると、大学生の抑うつ関連因子として父親・母親からのサポートが挙げられていることから、親との関係が大学生の抑うつに及ぼす影響は大きいと考えられる。さらに、うつ病は女性・若年者に多いとされることから（厚生労働省，2011），抑うつを経験する可能性が高いと考えられる女子大学生の抑うつについて検討する。

4. 母娘関係の分類

上述のように、母娘関係には様々なタイプがある。水本・山根（2010）においては、母娘関係のタイプとして、母親との行動的・精神的距離が近い「密着型」、母親との親密な関係のなかで息苦しさを感じていると考えられる「依存型」、行動的にも精神的にも母親との距離が遠い「母子関係疎型」、母親との間に最も成熟した関係を築いていると考えられる「自立型」の4つの群が抽出されている。また、藤田・岡本（2010）においては、現在母親が娘に対して支配的に関わっており、娘もそれに従っていると考えられる「従属群」、全般

的に母娘の関係が希薄であると考えられる「希薄群」、母親に対して依存的な群である「依存群」、過去に母親との対立を経験しており、現在も母親への信頼感や依存心が乏しい「離反群」の4つの群が抽出されている。

上記のように、各研究によって抽出される母娘のタイプは異なっているため、本研究においても再度母娘関係の分類を行う必要がある。そして、抽出された母娘のタイプごとの娘の自尊感情と抑うつについて検討する。

5. 本研究の意義・目的

北村（2008）はこれまでの研究から、母親に対する過去の愛着感情と母親に対する現在の親密的感情及び依存的感情のいずれもが、成人女性の抑うつ傾向、自尊感情と関連すると指摘しているが、成人期以降の母娘関係について、そしてその質が個人の心理的適応性にどのような影響を及ぼすのかについて検討している研究は少ない。また、母娘関係の類型と精神的健康の関連を検討することの必要性が指摘されている（水本・山根，2010）。よって本研究では、女子大学生を対象とし、「自尊感情」「抑うつ」を精神的適応・精神的健康の指標として、母娘関係との関連を検討する。

また、母娘関係に焦点をあてた先行研究においては、男性との比較はほとんど行われていない。そのため本研究では男性との比較を行い、母親との関係における男女差についても検討する。

本研究を行うことにより、母親との関係に不満を抱いていたたり悩んでいたたりす

る娘に対し、母親との関係における支援を提示することができるようになることが期待される。

【仮説】

1. 現在、母親と良好な関係を築いている娘（母親に対して肯定的な感情を抱いており、過去の対立も少ない、など）は、そうでない娘に比べて自尊感情が高い。
2. 現在、母親と良好な関係を築いている娘は、そうでない娘に比べて、抑うつは低い。

【方法】

1. 調査方法

①調査対象者：

徳島県内の大学に通う大学生 228 名（女性 136 名・男性 91 名・性別不明 1 名）のうち、フェイスシートの家族構成において「母」に○をつけた人 220 名（女性 132 名・男性 88 名）を分析対象とした。平均年齢は女性が 19.24 歳（ $SD=0.75$ ）、男性が 19.15 歳（ $SD=0.90$ ）であった。

なお、欠損値に関して、欠損値が尺度の項目の 10%以内であった場合にはその項目の最頻値を用い、10%よりも多い対象者は分析から除外した。

②調査手続き：

2012 年中旬に行われた講義の前半に質問紙を配布し、授業終了後に回収した。質問紙に添付した情報提供書をよく読んでもらい、その内容に同意して調査に参加する場合には、インフォームドコンセントの欄にチェックを入れた上で回答を行うよう説明した。

2. 質問紙の構成

①フェイスシート：調査対象者の属性（学部・学年・年齢）、性別、家族構成について尋ねた。

②母親との関係を測定する尺度：母娘関係尺度（藤原・伊藤，2007）を用いた。

「母への支え（5 項目）」「過去の対立・葛藤（6 項目）」「母の支配（9 項目）」「母への信頼（10 項目）」「母への依存（5 項目）」の 5 つの下位尺度からなる 35 項目について、「全く当てはまらない＝1」～「非常に当てはまる＝5」の 5 件法で回答を求めた。なお、男女差を検討するために、男性にも女性と同じ質問紙を用いて調査を行った。

③自尊感情を測定する尺度：自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）を用いた。

「少なくとも人並みには、価値のある人間である」「色々な良い素質をもっている」などの計 10 項目について、「あてはまらない＝1」～「あてはまる＝5」の 5 件法で回答を求めた。

④抑うつを測定する尺度：ベック抑うつ尺度（林，1988）を用いた。気分の落ち込みや将来についてなどの計 20 項目に関して、4 件法で回答を求めた。倫理的配慮の観点から、自殺に関する 1 項目を除いた。

なお、尺度②④においては、本研究で使用することに著作者の許可を得た。尺度③においては、原著作者及び翻訳者死去のため、著作権が設定されていない。

【結果】

1. 分析対象者（女性）の属性

分析対象者（女性）は欠損値を除いた 132 名であった。平均年齢は 19.24 歳

($SD=0.75$) で、母親と同居している者は 55 名 (41.7%)、別居している者は 77 名 (58.3%) であった。

2. 尺度の検討

女性のデータにおける母娘関係尺度の因子構造を確認するため、フロア効果が認められた項目「19.昔、母とほとんど口をきかない時期があった」、「23.昔は、母と気が合わなかった」を除外し、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。また、他の因子との共通性が.30 以下のものは除外し、因子負荷量が.35 以上のものを採用した結果、24 項目が採用された (Table1)。抽出された因子は母娘関係尺度の下位尺度とは異なるものであったが、先行研究（藤田・岡本, 2010）とはほぼ同様であった。よって、因子名は

藤田・岡本 (2010) にならい、第 1 因子を「母への肯定的感情」、第 2 因子を「母の支配」、第 3 因子を「過去の対立・葛藤」、第 4 因子を「母への依存」とした。

Cronbach の α 係数は「母への肯定的感情」「母の支配」「過去の対立・葛藤」「母への依存」の順に.91, .83, .86, .82 であり、十分な信頼性が確認された。

3. 母親との関係における男女差

母親との関係において男女で差があるかを検討するために、母娘関係尺度の 4 因子を用いて男女間で対応のない t 検定を行った (Table2)。その結果、「母への肯定的感情」と「母への依存」において、男性よりも女性の得点が有意に高かった (母への肯定的感情: $t(218)=-4.813$, $p<.001$; 母への依存: $t(218)=-3.27$, $p<.01$)。

Table1 母娘関係尺度 因子分析結果

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
第 1 因子 母への肯定的感情 ($\alpha = .91$)				
1. 何かと母の支えになってあげたい	.793	.168	.002	-.077
21. 母の気持ちを理解してあげたい	.793	.120	.049	-.065
8. あれこれと母の支えになってあげたい	.792	.235	.060	-.087
22. 母は私の人生のよき理解者だ	.743	-.209	.003	-.047
29. 母にはなんでも話ができる	.718	.150	-.088	.050
25. 困っていても、母に相談する気はない*	.696	-.079	-.005	.095
11. 母は私の気持ちを理解してくれる	.688	-.190	-.066	-.006
26. できるだけ母のそばにいたい	.653	.179	-.041	.098
4. 母は私の本当の気持ちをわかっていない*	.638	-.368	.121	-.164
31. 母に期待されると嬉しい	.636	.236	.010	.098
7. 母のようにはなりたくない*	.514	-.397	-.050	-.018
20. 母の人生に共感をおぼえるようになった	.430	-.199	.178	.121
第 2 因子 母の支配 ($\alpha = .83$)				
6. 母は私のことをなんでも知りたがる	.248	.779	-.137	.058
13. 母は、私が母の思うようにしないと機嫌が悪い	.064	.722	-.032	-.187
33. 母は、親の言うことを子どもがきくのは当たり前だと思っている	.203	.660	.006	-.062
10. 母は自分の意見を押しつけてくる	-.174	.646	.125	-.071
24. 母は私がやるべきことにまで手を出してくる	-.093	.642	-.032	.120
3. 母は私のことになんでも口を出したがる	.181	.634	.248	.072
第 3 因子 過去の対立・葛藤 ($\alpha = .86$)				
9. 以前は、母と言い争いが絶えなかった	.036	.019	.934	.049
15. 昔は、母によく口ごたえをしていた	.052	-.154	.879	.084
2. 昔は、母とよく意見が衝突した	.079	.122	.721	.023
27. 昔は、母がいやで仕方なかった	-.225	.034	.608	-.189
第 4 因子 母への依存 ($\alpha = .82$)				
5. 私は母に頼りすぎていると思う	-.106	-.031	.074	.986
12. 何かにつけ、つい母に頼ってしまう	.241	.044	-.009	.655
因子間相関				
因子 1	-			
因子 2	-.37	-		
因子 3	-.23	.45	-	
因子 4	-.19	.09	-.09	-

なお、男性の母娘関係尺度の回答の信頼性は $\alpha=.78$ であり、ある程度の信頼性が確認された。

4. 母娘関係尺度と自尊感情得点、抑うつ得点との相関

母娘関係尺度と自尊感情得点、抑うつ得点との相関係数を Table3 に示す。

分析の結果、「母への肯定的感情」と抑うつに有意な弱い負の相関、自尊感情に有意な弱い正の相関が認められた（抑うつ： $r=-.302$, $p<.01$ ；自尊感情： $r=.281$,

$p<.01$ ）。また、「母の支配」と抑うつに有意な弱い正の相関が認められた（ $r=.202$, $p<.05$ ）。

次に、同居群と別居群に分けて相関係数を算出したところ、同居群においても「母への肯定的感情」と抑うつに有意な弱い負の相関、自尊感情に有意な弱い正の相関がみられた（抑うつ： $r=-.427$, $p<.01$ ；自尊感情： $r=.394$, $p<.01$ ）。別居群においては、「母の支配」と抑うつに有意傾向がみられた（ $r=-.223$, $p<.10$ ）。

Table2 母親との関係における男女差

	男子		女子		t 値	p
	M	SD	M	SD		
母への肯定的感情	39.1	6.2	43.9	7.7	-4.81	***
母の支配	15.9	4.4	14.9	4.6	1.58	n. s.
過去の対立・葛藤	10.4	3.9	10.5	3.9	-.162	n. s.
母への依存	6.3	1.7	7.1	1.7	-3.27	**

** $p<.01$, *** $p<.001$

Table3 母娘関係尺度 4 因子と自尊感情・抑うつとの相関

	1	2	3	4	5	6
1. 母への肯定的感情	-	-.367 **	-.227 **	.454 **	.281 **	-.302 **
2. 母の支配		-	.448 **	-.193 *	-.015	.202 *
3. 過去の対立・葛藤			-	-.094	-.098	.132
4. 母への依存				-	-.070	.034
5. 自尊感情					-	-.764 **
6. 抑うつ						-
同居 (n=55)						
1. 母への肯定的感情	-	-.203	-.304 *	.377 **	.394 **	-.427 **
2. 母の支配		-	.411 **	-.186	-.059	.210
3. 過去の対立・葛藤			-	-.119	-.028	.085
4. 母への依存				-	-.001	-.050
5. 自尊感情					-	-.813 **
6. 抑うつ						-
別居 (n=77)						
1. 母への肯定的感情	-	-.484 **	-.177	.527 **	.120	-.207
2. 母の支配		-	.481 **	-.252 *	.186	-.223
3. 過去の対立・葛藤			-	-.08	-.153	.174
4. 母への依存				-	.106	.007
5. 自尊感情					-	-.718 **
6. 抑うつ						-

* $p<.05$, ** $p<.01$

5. 母娘関係の分類

母娘関係尺度の 5 下位尺度得点を用いてクラスター分析（Ward 法）を行い、4 つのクラスターを採用した。そして、各クラスターの特徴を検討するために、4 因子得点を標準化得点に変換した（Figure1）。

クラスター1 は、他群と比較して 4 因子得点がいずれも高く、過去に対立がありながらも現在母親に対して肯定的な感情を抱いており、母親との関係が非常に親密な関係にあることが伺えた。よって、クラスター1 を「親密群」と命名した。クラスター2 は、4 因子得点が他群と比較していずれも低く、母親との関係の希薄さが伺えたため、「希薄群」と命名した。クラスター3 は、他群と比較して「母への肯定的感情」、「母への依存」のいずれも低

いものの、「過去の対立」がやや見られた。よって、クラスター3 を「離反群」と命名した。クラスター4 は、他群に比べて「過去の対立」が、「肯定的感情」が低かった。よって、クラスター4 を「対立経験群」と命名した。各群の割合は、親密群、希薄群がそれぞれ 20.5%，離反群が 22.7%，対立経験群が 36.3%であった。

6. クラスター各群における娘の自尊感情得点、抑うつ得点の検討

クラスター各群における娘の自尊感情得点、抑うつ得点に差があるかを検討するために、クラスター各群を独立変数、自尊感情得点および抑うつ得点を従属変数とした一要因分散分析を行った（Table4）。

まず、クラスターごとの自尊感情得点

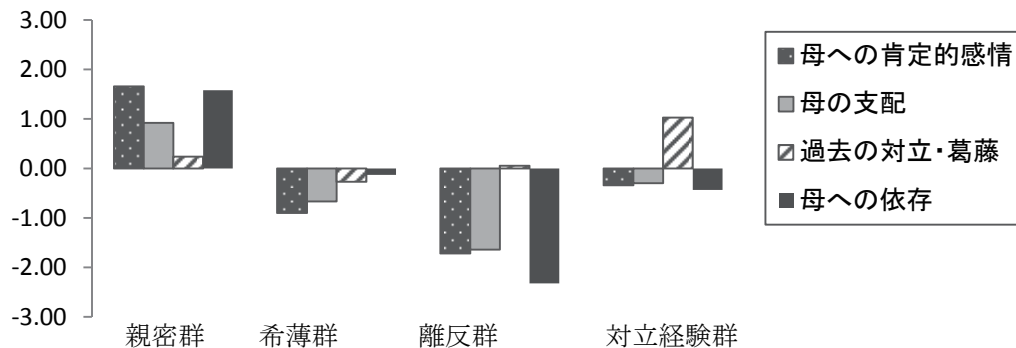


Figure1 クラスター分析結果

Table4 クラスター各群における娘の自尊感情得点、抑うつ得点

	1. 親密群 N=27	2. 希薄群 N=27	3. 離反群 N=30	4. 対立経験群 N=48	多重比較の結果
自尊感情	33.2 6.7	27.7 7.3	28.9 5.9	30.1 5.3	2<1
抑うつ	6.0 4.7	12.7 9.4	10.7 5.7	9.6 6.7	2,3<1

上は平均値、下は標準偏差

の差を検討したところ、有意な主効果が認められたため ($F(3,128)=3.91, p<.05$), 多重比較 (Tukey 法) を行った。その結果, 「親密群」は「希薄群」よりも有意に自尊感情が高かった ($p<.05$)。また, 抑うつ得点にも有意な主効果が認められたため ($F(3,128)=4.65, p<.05$), 同じく多重比較 (Tukey 法) を行った。その結果, 「親密群」は「希薄群」「離反群」よりも有意に抑うつ得点が低かった ($p<.05$)。

7. 各クラスター各群内における居住形態による差

各クラスター各群内において, 母親との同居の有無が娘の自尊感情および抑うつに及ぼす影響について検討するため, 二要因分散分析を行った (Table5)。

まず自尊感情において, 交互作用が有意であったので単純主効果の検定を行った ($F(3,124)=3.20, p<.05$)。その結果,

別居群において, クラスターの単純主効果が有意であり ($p<.05$), 母親と別居している親密群の娘は希薄群と対立経験群の娘に比べて有意に自尊感情が高かった。また, 離反群においても, 居住形態の単純主効果が有意であり ($p<.05$), 母親と別居している娘の方が同居している娘に比べて有意に自尊感情が高かった。

次に抑うつにおいても, 交互作用が有意であったため, 単純主効果の検定を行った ($F(3,124)=2.30, p<.10$)。その結果, 同居群においてクラスターの単純主効果が有意であり ($p<.05$), 母親と同居している離反群の娘は, 親密群に比べて有意に抑うつが高かった。また, 離反群においても, 居住形態の単純主効果が有意であり ($p<.05$), 母親と同居している娘の方が別居している娘に比べて抑うつが高かった。

Table5 各クラスター内における居住形態による差

	親密群 N=27		希薄群 N=27		離反群 N=30		対立経験群 N=48		群別 F値	同居・別居 F値	群 × 同居・別居 F値
	同居 (n=13)	別居 (n=14)	同居 (n=14)	別居 (n=13)	同居 (n=12)	別居 (n=18)	同居 (n=16)	別居 (n=32)			
自尊感情	31.69 5.98	34.57 7.29	27.92 8.50	27.47 6.06	25.91 5.62	30.94 5.32	32.31 5.25	28.93 5.09	4.50**	0.85	3.20
抑うつ	6.69 4.92	5.35 4.44	13.42 10.17	11.92 8.77	14.17 6.06	8.44 4.19	7.75 6.78	10.47 6.65	5.12**	1.43	2.3†

上段は平均値, 下段は標準偏差 * $p<.05$, † $p<.10$

Table6 娘の自尊感情および抑うつに影響を与えている要因

	自尊感情		抑うつ	
母への肯定的感情	.37	***	-.36	***
母の支配	-.06	n.s.	.10	n.s.
過去の対立・葛藤	-.01	n.s.	.03	n.s.
母への依存	-.25	*	.22	*
R^2	.14	***	.13	***

* $p<.05$, *** $p<.001$

8. 娘の自尊感情および抑うつに影響を与えている要因

娘の自尊感情および抑うつに影響を与えている要因を検討するために、自尊感情および抑うつを従属変数、母娘関係尺度の4因子を独立変数とした重回帰分析を行った (Table6)。

重回帰分析の結果、自尊感情・抑うつ共に重回帰式は有意であった ($R^2=.14$, $p<.001$; $R^2=.13$, $p<.001$)。娘の自尊感情に正の影響を与えているのは「母への肯定的感情」であり ($\beta=.37$, $p<.001$)、負の影響を与えているのは「母への依存」であることがわかった ($\beta=-.25$, $p<.05$)。また、娘の抑うつに正の影響を与えているのは「母への依存」であり ($\beta=.22$, $p<.05$)、負の影響を与えているのは「母への肯定的感情」であることがわかった ($\beta=-.36$, $p<.001$)。

【考察】

1. 母親との関係における男女差

母親との関係において男女差があるのかを検討した結果、母親に対する信頼や愛情といった気持ちは女性の方が男性に比べて高く、また、母親に依存している度合いも女性の方が高いことがわかった。これは、船越ら (2012) の「多くの研究で、父子間に比べて母子間で深い親子関係がみられている」という見解、藤原ら (2007) の「母娘関係の発達の様相に男女差があり、女性では他者との関係性、とりわけ母と娘の濃密で依存的な関係は青年期以降も維持される」という見解を支持するものであった。

2. 母娘関係のタイプと娘の自尊感情および抑うつとの関連

本研究ではまず、娘が捉える母親との関係を測定する尺度をもとに、大学生女性を「親密群」「希薄群」「離反群」「対立経験群」の4つのクラスターに分類し、クラスターごとの自尊感情・抑うつについて検討した。最初に「親密群」に関して、この群は現在、母親に対して比較的強い信頼感や親しみ、愛着を抱いている。また、母親への依存もみられる。過去に母親との対立はあるものの、その程度は大きくなく、対立を乗り越えて現在は母親への肯定的な感情を抱き、また母に依存していることがうかがわれる。これらを総合すると、現在も母親との間に良好な関係が築かれている群であると考えられる。以上のことからこの「親密群」は、本研究の仮説において定義した「母親と良好な関係を築いている娘」に相当するといえる。そして、この「親密群」が4つのクラスターの中で最も自尊感情が高く、抑うつは最も低かった。このように母親との距離が近い娘は、その距離の近さが娘の自尊感情を高め、抑うつを下げていることが推測された。しかし、「親密群」は母親への肯定的な感情と同程度に母親への依存が高い群であった。母親への依存は娘の自尊感情に負の影響を与え、抑うつに正の影響を与えるという結果が示されたことから、この「親密群」の娘の自尊感情の高さや抑うつの低さは必ずしも安定したものではなく、場面によって変わりやすく、揺らぎやすい不安定なものである可能性が考えられる。

次に「希薄群」に関して、この群は母

親への依存や、過去に対立した経験、母親に葛藤をおぼえたりした経験もほとんどなく、全体的に母親との関係が希薄であることがうかがわれた。この「希薄群」は、4つのクラスターの中で最も自尊感情が低く、抑うつは最も高かった。先行研究（水本・山根，2010）においても、このように母親との関係が希薄なタイプの母娘関係「母子関係疎型」が抽出されている。水本らによれば、この「母子関係疎型」では母娘間に心理的なすれ違いが生じており、それが娘の自立や適応の低下と関連しているとしている。本研究における「希薄群」においても同じような現象が生じており、そのことが娘の自尊感情を低下させ、抑うつを高めていると推測される。この「希薄群」は「親密群」とは反対のタイプであることから、本研究の仮説において定義した「母親と良好な関係が築けていない娘」に相当するといえる。

次に「離反群」に関して、この群は過去に母親との対立をやや経験しているほか、母親への信頼感や依存の程度はかなり低く、母親に対して反抗的な群であるといえる。矢幡（2000）によれば、その反抗が外側に向けば、ときに暴力行為という激しい行動となり、自己破壊という反抗が選ばれる場合には自傷行為や摂食障害などの心身症などの形となっており、この「離反群」のようなタイプは、臨床家が最も接触しやすい母娘関係であるとしている。

「対立経験群」は、特に過去に母親との対立・葛藤を経験している群である。この群は、ある意味では正常な発達段階

を経てきているといえるが、母親への信頼感や依存の程度はやや低く、過去に母親との間に生じた対立やそのときに感じた葛藤を現在もまだ解消しきれず、それが現在の母親への信頼感の低下や依存度の低さにつながっていると考えられる。

以上の結果から、仮説1「現在、母親と良好な関係を築いている娘（＝親密群）は、そうでない娘（＝希薄群）に比べて自尊感情が高い」、仮説2「現在、母親と良好な関係を築いている娘は、そうでない娘に比べて、抑うつは低い」は、ともにほぼ支持されたといえる。なおこの結果は、先行研究（水本・山根，2010）の結果を支持するものでもあった。

また、母娘関係尺度の4因子と娘の自尊感情得点、抑うつ得点の相関係数を算出した結果、母への肯定的な感情と娘の抑うつには有意な中程度の負の相関、自尊感情とは有意な中程度の正の相関がみられた。これは、同居群においても同様であった。しかし、別居群においては相関が見られなかった。このことから、母親と同じ家に住み、必然的に母親との距離が近い娘の場合、母親に対して信頼や愛情などの肯定的な感情を抱くことが娘の自尊感情を高め、抑うつを下げると考えられる。

その他にも、母娘関係尺度の4因子間において有意な相関がみられた項目があり、母親の支配が強いほど、母親に対して肯定的な感情を抱く程度は低いことが示された。この結果は、「墓守娘」の特徴を表した結果であるといえる。

3. 娘の自尊感情および抑うつに影響を及

ばす母娘関係の要因の検討

娘の自尊感情および抑うつに影響を及ぼしているのは「母への肯定的感情」「母への依存」であり、母親に対して肯定的な感情を抱いていることが娘の自尊感情を高め、抑うつを下げているのに対し、母親への依存の度合いが高いほど、娘の抑うつは高く、自尊感情は低いことが示された。

「母親への肯定的感情」の中には、母親への信頼や愛着といった感情が含まれている。水本ら（2011）は、娘の自尊感情の高さは母親との信頼関係の高さに関連すると推定されると述べている。以上のことから、娘が母親に対して信頼や愛着といった肯定的な感情を抱いているとき、娘の自尊感情は高くなることが示された。また、本研究において自尊感情と抑うつには強い負の相関がみられたことから、このように娘の自尊感情が高くなると、娘の抑うつは低減されることが示された。

一方で「母親への依存」に関しては、北村・無藤（2001）の結果を支持する結果となった。北村らが述べているように、母親に対して依存しすぎたり母親のことを気にかけすぎたりすると、たとえば新たな人間関係を構築することが困難となり、その結果抑うつが高まることが考えられる。

4. 居住形態が娘の自尊感情および抑うつに及ぼす影響

母親と同居しているかどうかは娘の自尊感情および抑うつに影響を及ぼすのかどうかを各クラスター内で検討したところ、

母親と別居している離反群の娘は、母親と同居している娘に比べて有意に自尊感情が高く、抑うつは低いことが示された。また、母親と同居している離反群の娘は、親密群に比べて有意に抑うつが高いことが示された。離反群は他群よりも母親への信頼感や親密さ、依存の度合いが低い群であった。以上のことから、この群の娘にとって母親は一種のストレスになっていると推測される。そしてそのような母親と別居することで母親から物理的に距離を置くことができ、それが自尊感情を高めることに繋がっていると考えられる。

次に、母親と別居している親密群の娘は、希薄群と対立経験群の娘に比べて有意に自尊感情が高かった。このことから親密群においては、たとえ一緒に暮らしていなくとも、母親と精神的につながっているという愛着にも似た安心感（水本ら、2010）が、娘の自尊感情を高めると推測される。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究は母と娘の関係に関するものであったが、調査を行ったのは娘に対してだけであった。そのため、本研究で扱った「母娘関係」は娘側からの認知に頼ったものであった。本研究では「母親と良好な関係を築いている娘は、そうでない娘に比べて自尊感情が高く、抑うつは低い」という結果が得られたが、ここでの「良好な関係」は娘の認知に頼ったものであり、母と娘の双方の立場からみたときにその関係が良好なものであるという保証はない。水本ら（2010）が「親子

関係を捉えるにあたり、子の認知のみを扱うのは不十分である」「互いの関係性の捉え方が親子間で異なることは十分考えられる」と述べているように、娘側の認知だけで母娘関係を説明しようとすることは難しい。このことから、母親が娘との関係をどのように認知しているかを測定することは、母娘間の問題を検討するためには必要である。

また自尊感情に関して、高い自尊感情には適応的なものと不適応的なものがあることが理論的にも実証的にも報告され、自尊感情の概念的な見直しが試みられている（伊藤・小玉，2005）という指摘がある。本研究では、高い自尊感情をこのように区別することなくひとくくりにして扱ったが、今後は伊藤らの指摘する「適応的な自尊感情」と「不適応的な自尊感情」という区別を念頭に置いた研究が求められるといえる。

最後に、本研究においては、母親との距離が近いことが娘の自尊感情を高め、抑うつを低減させるという結果が得られた。よって本研究では、母と娘の距離が近いということを肯定的に捉えた。しかし、本研究と同じ立場に立った、「仲のよい母娘関係は本当に危ういのか（渡邊，2004）」という指摘がある一方、「仲のよい母娘関係が危ういとする見方（藤田・岡本，2009）」もある。このように、母娘関係の捉え方は研究者によってさまざまであることから、これからも多面的な角度から母娘関係の研究を進めていくことが求められる。

6. 臨床的展望

本研究では、母親との関係が希薄な娘は自尊感情が低く、抑うつが高いという結果が得られた。そして、このような娘とその母親との間には、心理的なすれ違いが生じている可能性があることが示唆された。このような母娘に対しては、たとえば母と娘がじっくり話し合う機会を設ける、またそれをスムーズに行うためのプログラムを開発するなどの方法をとることで、少しでも母娘関係を良好にするような介入を行うことができると考える。

また、母親に対して離反的な娘は、母親と同居していないほうが抑うつは下がり、自尊感情が高まるという結果が得られた。このことから、家庭内暴力や自傷行為などでこのような母娘が臨床家のもとに相談に訪れた場合、母と娘が物理的に距離を置くなどのアドバイスをすることができる。

【参考・引用文献】

- 藤田ミナ・岡本祐子（2009）青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連 広島大学大学院心理臨床研究センター紀要，8，121-132
- 藤田ミナ・岡本祐子（2010）青年期後期における娘のとらえる母親との関係性 広島大学心理学研究，10，201-216
- 藤原あやの・伊藤裕子（2007）青年後期から成人初期にかけての母娘関係 青年心理学研究，19，69-82
- 藤原あやの・伊藤裕子（2010）青年後期から成人初期における女性の心理的発達—母娘関係が心理的健康に及ぼす影響— カウンセリング研究，43，33-42

- 船越かほる・岩立志津夫 (2012) 移行期女性 (青年後期～前成人期) の母娘密着 日本女性大学大学院人間社会研究科紀要, 18,, 31-46
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005) 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53(1), 74-85
- 加藤悠・中島美那子 (2011) 母親の自尊感情と養育態度—子どもの自尊感情を育むために— 茨城キリスト大学紀要, 45, 119-129
- 菅佐和子 (2010) 親が注ぐ無条件の愛と自己肯定感 児童心理, 64(4), 311-316
- 北村琴美・無藤隆 (2001) 成人の娘の心理適応と母娘関係: 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, 12(1), 46-57
- 北村琴美 (2008) 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連— 心理学研究, 79(2), 116-124
- 北川朋子 (2004) 母娘関係の発達的変容—ライフサイクルを展望して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 52, 271-273
- 厚生労働省 (2011) みんなのメンタルヘルス 総合サイト
<http://www.mhlw.go.jp/kokoro/>
(2012/11/15 アクセス)
- 水本深喜・山根律子 (2010) 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味: 精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究, 21(3), 254-265
- 水本深喜・山根律子 (2011) 青年期から成人期への移行期における母娘関係: 「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討 教育心理学研究, 59(4), 462-473
- 信田さよ子 (2008) 母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き 春秋社
- 信田さよ子 (1997) 一卵性母娘な関係 主婦の友社
- 及川恵・坂本真士 (2007) 女性大学生を対象とした抑うつ予防のための心理教育プログラム 教育心理学研究, 55(1), 106-119
- 小川由希子・山田智世・杉山里美・上岡美紀・平田裕美 (2011) 父親・母親の言葉かけと青年期女性の自尊感情との関連—影響を及ぼしているのは父親, それとも母親?— 女性栄養大学紀要, 42, 35-41
- 高倉実・崎原盛造・與古田孝夫 (2000) 大学生の抑うつ症状に関連する要因についての短期的縦断研究 民族衛生, 66(3), 109-121
- 渡邊賢二・平石賢二 (2007) 中学生の母親の養育スキル尺度の作成—学年別による自尊感情との関連— 家族心理学研究, 21 (2), 106-117
- 渡邊恵子 (2004) 母親と娘はなぜ親密か—青年期から成人期にかけて— 柏木恵子・高橋恵子 (編) 心理学とジェンダー: 学習と研究のために 31-36
- 八幡洋 (2000) 強すぎる母-娘関係に生じる問題 児童心理, 54(1), 28-33

(受付日2013年10月1日)

(受理日2013年10月10日)